

学生とのコミュニケーション研究

——大教室での授業を中心に——

● 土 屋 博 映

1、はじめに

教養科目や一年生から履修できる専門科目は、履修者が多いのが普通である。また同一時間にある他の開講科目や、開講時間・曜日なども関係して大人数での講義がやむをえないという現象が起こることがある。あまり大人数ではきめ細かな講義は不可能に近い。そこで抽選となるのだが、抽選漏れした学生の身になれば、なぜ履修したい科目がとれないのか、不公平感を抱くのは当然である。まあ、ゼミや卒業論文、実習・演習などは確かに人数制限しなくてはやっていけないし、本来、大人数にするべきではない。だが、講義についてはどうだろうか、学生のためを考えたら、できる限り受け入れる姿勢を教師の側で持つべきではないか。私は、短大の衰退を目の当たりに見て、女子大に転任し、キャンパスの広さと、研究室のすばらしさと、学生数の多さに歓喜した。これこそが大学だ、と本当に生きる喜びがわいてきた。だからこそ、学生が多すぎるなどというのは贅沢だと思えなかった。そこで、どんなに大人数の学生が来ても、教室に入る限りは受け入れようと決意したのだ。

その契機となったのが、女子大に転任して担当した、「国語学概論A」の授業である。最初の講義は1501教室、300名は収容できると言うが、教室に行き、驚いた。授業開始前にすでに座席は満杯。講義を開始しても学生は増えるばかりで立ち見の学生が相当数増えた。これではどうしようもない、一応第1回だけは学生に我慢してもらい、教室変更を考えると同時に、抽選はする気はない、聴講したい学生はすべて受け入れる

旨伝えた。

教務と相談した結果、結局、KMH（花蹊メモリアルホール）を使うことにした。450名は入るといっているので、これなら、どう学生が増えても大丈夫だと判断したからである。そこで、第2回目から KMH での授業ということになったのだが、そこで、飛び出した問題点は、以下にのべる5点である。

2、大教室の授業の問題点

大教室の授業の問題点をまとめると、次の5点である。

①出欠・遅刻にどう対処するか。②私語をどうやめさせるか。③どう理解させるか。④どうやる気にさせるか。⑤役に立つ何を与えられるか。以上の問題点につき、それぞれの内容について述べる。

1、出欠・遅刻にどう対処するか

「国語学概論A」は月曜日の2時間目である。寝坊が原因の遅刻はそう多くはないが、1時間目を受講している学生にとっては10分間の休み時間で KMH に1号館や2号館から移動するのはトイレ時間なども考慮すれば、そうたやすいことではない。それはそれとして、350名を越える人数の出席や遅刻を一々点検するのは至難の技である。単純計算で、出席を一人ずつ確認すれば、それに要する時間を2秒としても700秒、つまり10分以上が無駄になり、かつ学生の集中力は著しく失われることになる。

2、私語をどうやめさせるか

短大時代にも経験したが、短大ほどではないにしても、女子大でもやはり私語はある。それも人数が多くなればなるほど私語は増加する傾向にある。つまり人数の多さと私語の多さは相関関係を持つのである。したがって300名を越えた場合の私語は大変なものになる。過去の経験から言って、ただ怒鳴ればいいというものではない。とにかく1対350では多勢に無勢なのである。

3、どう理解させるか

ゼミなどの少人数制の授業であるなら、一人一人の顔色を見ながらでも進められる。理解不能な点を具体的に把握し、納得するまで説明することが可能である。ところが350名の学生となると、一人一人の顔色など確認している余裕などない。またまた単純計算で、20名のゼミと比較すると、一人に関わりうる程度は20分の1弱である。つまり20分の1しか理解させられないのが現実ということになる。

4、どうやる気にさせるか

最初から先入観を持ってはいけないのだが、ごく少数の学生を除いては、大部分が「国語学概論A」の授業に大きな期待を持ち、やる気になって受講しにきたのではない。単位が必要であり、かつその時間が空いていた、という要素が多分にあるものと考えられる。やる気にさせなければ、授業をやる意味がなく、学生自身のためにもならない。大体やる気のない学生350名を前にして授業を続ける教師にとっても精神衛生上よくない。

5、役に立つ何を与えられるか

大学の教師は、学生に何を与えられるのか。これが小学生なら、中学受験のための知識、中学生なら、高校受験のための知識、高校生なら、大学受験のための知識、ということで、必ず役に立つのだが、大学の教師にはそれができない。では、どういう役に立つことが与えられるのか、90分間、350名の学生に対すると、またまた単純計算では、1名につき使える時間は15秒ということになる。これでは挨拶だけで終わってしまう。役に立つことなど与えられるわけがない。

3、現代学生事情

ここで、現代の学生事情について、二つの点から検討を加えてみたい。

1、絹川氏講演会（04年3月3日女子大学FD委員会主催）

私が短大在任中、女子大で行われた講演「授業評価を生かす」（絹川

正吉氏)に参加させていただいたのだが、この講演には大変感銘をうけた。実は、そこから私の教師としての新たな旅立ちが始まったと言っても過言ではないほどである。

講演の要点を述べると次のようである。

今までの教員の姿勢は保守的である、ということにつきる。「教員評定は学問の自由の侵害・学生の教授活動評価は不可能」という頑なな態度、「サルのような中身のない学生や、不真面目な学生に授業評価はできない」という決め付け、だという。

要するに古い象牙の塔的な体質にひたっている教員への提言だと言ってよい。

その古い体質に対し、「教員の自己責任放棄・知識の一方的伝達」と批判し、「なぜ学ぶか」「どのように学ぶか」に教員が答えていない、とまとめられている。

その他、様々の感動的な分析が記されたが、その詳細についてはここでは省略するが、そこから「教育団資質開発 (FD)」の必要性があると結論づけておられた。

実は、絹川氏の講演のほとんどは、私がおぼろげに考えていたことと同じであった。感銘のひとつは、絹川氏のような大学者も私と同じことを考えていたのだ、ということであった。その中で、私が実行していたことをさらに発展させていると思われたことが一つあった。それは「コメントシート」の実行である。「授業改善のためには、毎回のコメントシート方式が有効・必ずフィードバックする」ということだ。私も毎回授業の最後にレポートを書かせていたが、それをさらにお手軽にやろう、ということで、これがヒントになり、後述する、授業の最初と最後にレポート作成、という私の授業方式につながったのである。

絹川氏の講演から、私は授業と教師等のあり方を次のようなものだと勝手に結論付けてみた。「授業は民主的に、経営は独裁的に。教師はパーソナリティ。理念よりも実践。教授だというプライドは捨て去る。」と

ということ。これが以後の私の教師としての信念ともなり、またモットーとなった。

2、短大レポート・論文

絹川氏の講演に触発された私は、平成16年度の短大の授業で、学生へのコミュニケーションの一環として早速アンケートを試みた。それは「跡見生の授業への期待」(04年度・短大FD報告集)としてまとめておいた。要点を記しておく。

アンケートは、「①教師にどう接してほしいか、②授業をどう進めてほしいか、③自分は授業にどう取り組んでいくか、④この授業に何を期待するか」の4項目、すべて自由記述である。対象授業は「ことばのトレーニング」(23名)、「小論文を書く」(13名)、「日本語を知る」(54名)、「国文セミナー・卒業研究」(19名)、である。以下各項目での結果のまとめとして数の多い五つを記す。

①→「フレンドリー22 明るく12 楽しく12 やさしく8 気軽に8」

②→「楽しく32 わかりやすい26 ゆっくり24 おもしろく18 ていねい4」

③→「頑張る30 出席する20 積極的15 眠らない12 熱心に11」

④→上記3項目のような整理は不可能、「楽しく実力をつけたい」という傾向にある

以上をもとに、次のようにまとめてみた。

☆教授の学生に対する姿勢はどうあるべきか

①教授意識(プライド)は捨て去る(極端に言えばタメの精神)。②一般の教授は若くはないのだから、精神だけは、柔軟に若くする。③早めに学生との信頼関係を築く。

☆授業の工夫はどうあるべきか

①チャイムがなれば教室にいる(時間にルーズなのはなめられる)。
②挨拶はきちんとする、させる(伝統ある「ごきげんよう」が最適)。

③机の上は筆記用具のみ、食べ物・飲み物などは片付けさせ、帽子など理由がなければとらせる(普通に言えばわかる。ほっておけば何でもあり、となめられる)。④うるさい時は「うるさい」と言って決着をつける(「うるさい」言ってうるささが残るのでは言った意味がない)。⑤メモやレポートで言いたいことを言わせる(腹が立つこともあるが、謙虚に反省し、必ずコメントをつけて返す。学生と教員の相互交流がなくては信頼関係は生れない)。⑥毎時間授業スケジュールを作成(1講義、1フロッピー)。

以上である。それと関連し次の論文もまとめた。「短大生の指導法研究——『ことばのトレーニング』から——(04年度・短大紀要)」。この論文の最後の部分を取り上げておく。

「これだけ熱の入った授業は短大生活で初めてとってよいかも知らない。それは、自分に科目設定者としての責任感があったからだろうと思う。新設の『ことばのトレーニング』は、コア科目の一つであり、最重要科目の一つでもある。その新設に中心となって関わったものとしてやはりよい授業にしたいという思い、また担当の先生方に責任ある方向性を示さなければならないという思いが強かった。(中略) 1、計画はたてるべき、その根幹となる方向性はまもるべき、しかし臨機応変に内容を変更するという柔軟性が必要である。2、教師としてのよい意味の威厳は必要、しかし、プライドだけで、自分をまもり、学生の状況を考えもせず、意見をきかないのは傲慢である。3、学生は実践あるのみ、実践をとおして、自分を見つめ、表現をしていくようになる。4、教師は、抽象的ではなく、具体的に学生を導く、それも明るく、元気よく、積極的に。」

ところで、同年、早稲田大学第二文学部に合格した女子大生に同様のアンケートに協力してもらった。以下は彼女からのメールである。

「お返事遅くなってすみません。新潟の実家に帰っていました。早速ですがアンケートに対する回答です。『都市イメージのアルケオロジー』

という少人数制のクラスを想像しました。1、教師にどう接してほしいか→授業以外の時間でも生徒(ママ)と専門分野についてや興味のあることについてはなす時間を持ってほしい。集団のなかとはまた違った教授の姿がみることができるとおもう。2、授業をどう進めてほしいか→座ったままでの授業で精神的にマンネリ化してしまうことがないように、口頭だけの授業にくわえ、屋外にでて実際の建築物をみることで視覚を養い、外の空気を吸うことで嗅覚を養うような野外活動を取り入れてほしい。3、自分はどとりくんでいくか→板書はもちろん、口頭で話されたことに重きをおいてメモしたい。また、グループでの活動は自分を刺激するよい機会なので仲間との意見交換を大事にしたい。4、授業に何を期待するか→専門分野の学習にくわえて、教授の人生観やものの見方や感じ方なども講義のなかで話してほしい。大学の授業は「出会い」だと考えているので、教授から薫陶をうけることができるような授業を期待します。以上です。付け加えていえば、早稲田にいて(ママ)自分で行動することの大切さを一番感じました。それではまた」(04年5月)

これを短大生の結果と比較すると面白い。3、4についてはかなり近い。異なるのが1、2である。短大生が教授の外面的な態度について希望しているのに対し、早大生は教授の内面の知識等に期待している点に注目される。これが女子大にも適用されると考える。

以上をふまえて、私は、大教室での授業でのコミュニケーションの改善について思考し、行動に移してみた。

4、大教室での授業

「国語学概論 A」(平成17年度春学期→KMH ※この授業については、『人文学フォーラム』〔平成17年度〕に研究ノートとして報告した)を、大教室(大人数)の授業と位置付け、その授業の工夫、学生とのコミュニケーションの改善について、実際に考え、実行したこと、その反省などを論じ、まとめてみたいと思う。以下、実行したことを取り上げ、その発想と結

果、反省、今後の方向等について検討を加え、述べることにする。

1、レポート用紙を授業前に配布（裏側にテーマを与えて書かせる→出欠はとらない）。

遅刻と欠席をチェックするのが大変なら、それはやめてしまおうと考えた。大体、私は何もかもがきちんとしていなくては気がすまない性格なので、短大時代はチャイムと同時にドアをロックし、遅刻は一切認めなかったくらいだ。しかし、今時の学生事情を考えると、こちらの考えをそのまま押し付けてもどうもうまくいかないようだ。大学に勤務して大きく変わったのは、その柔軟性だと思う。キャンパスが広く、間に合おうと思っても無理なときがある。チャイムで一斉に開始できないのなら、授業最初の5分、乃至10分程度をレポート作成に充ててしまえばいいのだと気がついたのだ。これは前記絹川氏の講演がヒントである。授業開始の10分以上前に私はKMHに到着し、様々な準備をする。その一つがレポート用紙配布と、そのテーマを知らせることである。だから開始前にスタンバイしている、いわゆる真面目な学生(?)は、遅刻する、いわゆる不真面目な学生(?)に対し、10分間ほどの絶対的優勢な位置を占めることができるのである。遅刻した学生は白紙の場合さえある。欠席者はもちろんレポートの存在がないので、点はつかない。ということで350名という人数の遅刻・出欠については決着がついた。ただし、これは用紙の裏側であって、表側は最後に書かせるのである。その間、教師は何もせず楽をしているようだが、学生のレポート作成中はホール内を巡回している。質問があれば答える、そういうコミュニケーションを気楽にできる時間帯としているのである。さらに、大変なのは授業後である。350名のレポート、表裏すべてを添削した場合、1名で表1分、裏1分は最低限必要な時間である。つまり700分（10時間以上）という超過勤務が待っているというわけである。なお、これを半期続けていると、どんなに文章力のないものもある程度書けるようになる。教師の負担は大変なものだが、これによって役に立つ授業ということは一応言え

るのである。

2、「ごきげんよう」の挨拶をする(机上是筆記用具のみ・着帽は禁止)。

チャイムが鳴り、そこで一度挨拶をする。レポート作成はそのまま継続である。ここから、机には筆記用具のみ。それ以外は片付けさせる。また着帽も禁止、ただし寝癖がついたとかいう女性らしい理由があればそれは認めている。これは、授業開始の儀式である。何事もけじめが必要ということ、何でもありという態度は戒めたいわけである。一度そう宣言したらそれは余程の理由がないかぎり、頑なに守らせる。それは教師にはポリシーがあるということ、それを知らしめること、またそれを守らせることにより、かえって教師の信用が勝ち取れると思うからである。「守れ」と言っておきながら、注意しないのでは、守っている学生が不公平感を持つばかりであるから。「ごきげんよう」の挨拶は、10時40分開始時とレポート作成終了時刻の10時50分にも再度行われる。これは頑なに担当の全授業で行った。発言したことは守る責任があることを体で感じさせたつもりである。最初「ごきげんよう」の挨拶に照れていた学生も最後には平気で言えるようになる。「ごきげんよう」が言えると、言葉遣いに多少なりとも進歩が見られる。精神的にも上品になる。これも役に立つ授業の一因と一応言える。

3、授業はパソコン画面(あらかじめフロッピーに板書内容すべてうちこんでくる)を用いる。

前述のとおり、第1回の授業は1501教室で行われた。しかしそれでは収容不能なので、KMHに教室変更をしたのである。ところがKMHには黒板がなく例の小さな白板が一つのみであった。沢山書けない上に座席によってはライトの光でよく見えないという現象も起きてしまった。そこで勇気を持って苦手なパソコンを使うことにした。最初は授業中に打ち込んでいったのだが、後にはフロッピーに板書内容をすべて打ち込んでくるようにした。パソコン画面なので、見やすいことと、常に学生の側を向いていられるので、よい意味で監視できるようになった。何と

言ってもノートをとりやすくなったことが学生にとってプラスであり、とりやすければ、それに集中し、私語も幾分か減っただろうと考える。

4、テキストに線をひかせ、画面を参考にノートをとらせる。

テキストは『国語要説』（おうふう・1575円）を用いている。決して安くはないテキストだから、使ったという実感をもたせたい。満足感である。かなり高額な自著の本をテキストにしてほとんど使わないという教師もいるらしい。それはやはり詐欺というしかないだろう。授業では、テキストの重要部分にサイドラインをまずひかせる。これも集中してはひくことができない。そしてその部分を画面に映し出し、それをノートにとらせるのである。ノートをとっている間にこちらはホール内を何度も巡回し、質問を受ける。これで最低限のコミュニケーションはとれるし、学生の私語もふせぐ効果がある。さらにテキストとノートは評価の一環となっている。次の四点、「①テキスト②ノート③返却レポート④小論文提出」すべてをチェックした上で合格点となるので、もちろん①と②はおろそかにできない。つまり、無駄にテキストは買わせないし、無駄にノートはとらせないのである。授業への学生の満足感の一つとなっていると思う。

5、授業の双方向性（授業中、大人数でも気楽に質問できる雰囲気をつくる）を常に意識する。

授業中、一区切りついたところで、必ず、疑問・質問を尋ねることにしている。またレポート作成中、ノートに写している最中、ホール内を巡回するので、そこでもやりとりはしている。しかし、ただそう言っただけでは駄目で、気楽に質問できる雰囲気を作ることが必要だ。怖い顔をしていて、質問しろと言っても学生にできるわけがない。どんな質問でも、えらいね、よく質問したね、と必ず言うようにこころがけ、できるだけよい質問だとほめるようにしている。質問の内容よりも、質問しようという姿勢が大事だと教えたいのである。授業中だけでもかなり双方向性のやりとりが効果的に行われていると思う。進んで発言する姿勢

は一生の財産だと思う。積極性を与えることになるから。

6、最後に授業内容についてのレポートを書かせる（表側に、テーマを与えて書かせる）。

授業の最初に書くレポートは裏側である。裏側は前回の復習的な内容、表側は今回の学習した内容、ということで、レポートで予習・復習をかねるといふ効果がある。毎回のレポートであるから、学生は、表側のレポートのために授業をしっかりと聞かねばならず、裏側のレポートのために、授業後、復習をしておかねばならないということになる。したがって、学生はかなり本気にレポートを書いている。

7、レポート提出は教壇に、学年ごとの位置に重ねておかせる。

教壇に提出させるその時、壇上にいる私と一人一人が、嫌でも応でも顔をあわせることになる。そこでは350人全員と笑顔で「ごきげんよう」の挨拶をすることが可能となる。レポート提出も立派なコミュニケーションである。

8、レポート評価をする。

これは自宅に帰ってからの超過勤務である。全員のレポートの表裏に目をとおり、○A, A, B, C, D, Eと採点・評価し、コメントをつける。質問には端的に答え、良い字はほめる。他の科目も同様に行っている。毎週およそ500枚程度表裏評価をする。単純計算すると100分、16時間強の時間が採点にとられてしまうわけだが、それでこそ、大人数でもコミュニケーションが取れるというものだ。誰にも必ずコメントをつけるので、学生はレポート返却を心待ちにしているようだ。○Aを狙い、よい字を書き、ほめられる、これを学生たちは期待している。裏側から採点するのだが、裏側には名前が書いてない、しかし10回目の授業の頃には字を見ただけで、名前が浮かぶようになる。これも立派なコミュニケーションといえよう。

9、成績発表をする

授業の冒頭で、前回レポートにつき、○Aは、成績優秀者として評価

し、画面に掲示、さらに表裏○Aのものは学生を紹介し、内容を読み上げて、そのすばらしさをたたえる。その○Aがほしくてみな頑張る。○A常連者は授業のスターである。初めて掲示された学生が狂喜乱舞するのを見るのはこちらもうれしい。遅刻すれば、時間がなく、裏のレポートはBがやっと。授業を聞いていなければ、表のレポートはCすらとれない。欠席すれば、もちろんレポートの存在がないので評価はつかない。毎回の表裏のレポートはまさに、コミュニケーションと喜びと、出欠の取り扱いまですべてクリアーしたのである。

10、コミュニケーションはレポートでする。

不満があれば、学生はレポートに書く。もちろん希望・連絡などもマンツーマンでやりとりができる。批判された時は、人間だから、それは腹が立つが、反論がある時は、こちら冷静に、客観的に反論する。学生がよい意見をした時は、やや大げさにほめる。私語について、授業の進め方について、教師に聞く耳があれば、学生は安心する。わかっているという安心感だ。レポートによって1対350の差はほぼ1対1レベルにまでアップしているということが言えよう。学生が安心するばかりではない。教師であるこちらにも、勉強になることが多い。ここまで述べて来た授業内容進化は、すべて学生のおかげと言ってよい。教師が学生によって育てられるというのは、決して誇張ではない。

11、返却は授業前に学年ごとにわけて（多い学年は分割する）教壇におく。

返却は、封筒に学年ごとにゴムで巻いておいて、当日それを教壇に学年順に並べておく（学籍番号順に整理するだけで30分はかかる）。封筒にはもちろん学年が記してあり、保存と掲示の両方が出来るようにしてある。学生の意見により、人数の多い学年は2分割、3分割することもある。なお優秀者は授業の最後に直接手渡しして、それを讃える。ここでも優秀者とのコミュニケーションが成立している。だから一度は○Aがほしいという学生の願いも生れてくるというわけだ。

12、授業最後は、全員で「ごきげんよう」の挨拶をする。

最初と最後の挨拶「ごきげんよう」は、はじめである。この挨拶で、教師も学生も「やるぞ」とやる気になり、「今日も頑張った」と爽快感を抱けるのである。そしてレポート作成の10分間は心地よい、教師と学生のコミュニケーションの時間となる。

13、成績評価

成績評価は、試験期間に全員が直接前述の三点セットを教師の所まで持ち寄る。テキスト、ノート、返却レポート（小論文は別提出）を、すばやくチェックし、それぞれに印鑑を押す。その印鑑は試験期間に出すレポート用紙にも押すので、後での確認が可能となる。またチェックのところで、名前と顔が一致し、そこで簡単な会話、ほめることなど、も可能となる。成績評価もちゃんとコミュニケーションをとっているのである。

5、結論

大教室のコミュニケーションも小教室のコミュニケーションも、やり方によっては十分とれると言ってよい。大事なことは、学生と授業を楽しもうという姿勢だろうと思う。教えてやるというよりは、ともに学ぶ、という、タメの気持ちである。また工夫は常にこらすこと。できないと思ったら、何でも終わりである。女子大に来て、スーツ姿はやめた。別によいこととはいえないのだが、スーツでは大教室を縦横無尽にとびまわれないのである。抽象的な偉そうな理屈より、具体的で親しみの持てる行動を学生はのぞんでいるのだ。

※本稿は、06・7・12（水）FD ワークショップで発表した内容をさらに発展させてまとめたものである。